

お袈裟のミステリー

正傳衣と如法衣

大本山総持寺祖院單頭

関 口 道 潤

一、月に棲むのはウサギかカエルか

そのむかし、「月にウサギが棲んでいる」という説に対し、「いや月にはカエルが棲んでいるんだ」という意見が出て、久しく紛糾したことをご存じだろうか。もちろんこんなことを、現在の小学生に質問すれば、「月にはウサギもカエルも棲んでいないんだよ」という返答が返ってくる

るのに決まっている。このウサギとカエルの意見の対立は結局、科学技術が未発達段階に、予断や空想にしがたって起こされたもので、今日の科学的知識によって、両者ともに誤解であることがわかった。

ところで、これは多分に出家修行者の側からの心持ちだが、私たち佛教徒の信仰の中心には「髪を剃る、袈裟を搭ける、坐禪をする」

という三つの特徴が有る。私は先だって、ボランティア活動の一環でカンボジアのある片田舎に行ってきた。それは私どもの仲間で、カンボジアのある小学校に校舎建設の資金を贈呈したために、その贈呈式が行なわれたからである。

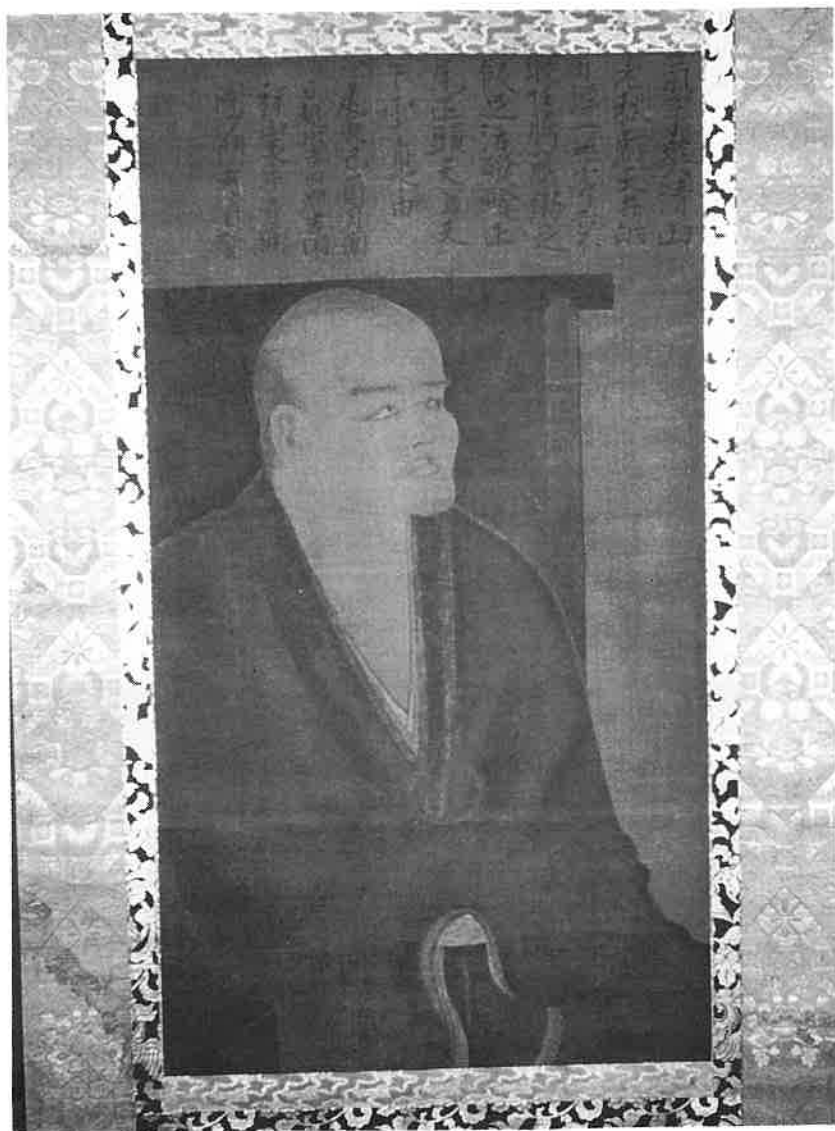
式は先ずカンボジアの僧侶四名が祈禱の読経をし、引き続いて私たち日本側十三人の僧侶も同じく読経した。私は麻地木蘭色の袈裟を、右肩をはだぬぐように搭けて読経したところ、カンボジア側の長老僧は同じように偏袒右肩で応対されたのを見て、特別な言葉こそは交さなかったけれど、日本とカンボジアという国の違い、大乘と上座部との系統の違いを超えた、「共通の佛教徒である」ことを実感したことであった。

二、お袈裟は自覚の命を生きるお守り

先ほど私は、へ私たち佛教徒の信仰の中心には「髪を剃る、袈裟を搭ける、坐禪をする」とい

う三つの特徴が有る」と言ったが、これは実は道元禪師の『正法眼藏袈裟功德』の巻の「あきらかにしりぬ、剃頭著袈裟よりこのかた、一切諸佛に加護せられたてまつるなり」という言葉を平たく言っただけで、もともと道元禪師の教えである。道元禪師という方は、日本佛教界の中でも異色なくらいに「佛祖正傳」の袈裟を強調し、これを大切にし、その意義を究明されておられる。その道元禪師の宗教的自覚の集大成として『正法眼藏袈裟功德』の著作がある。

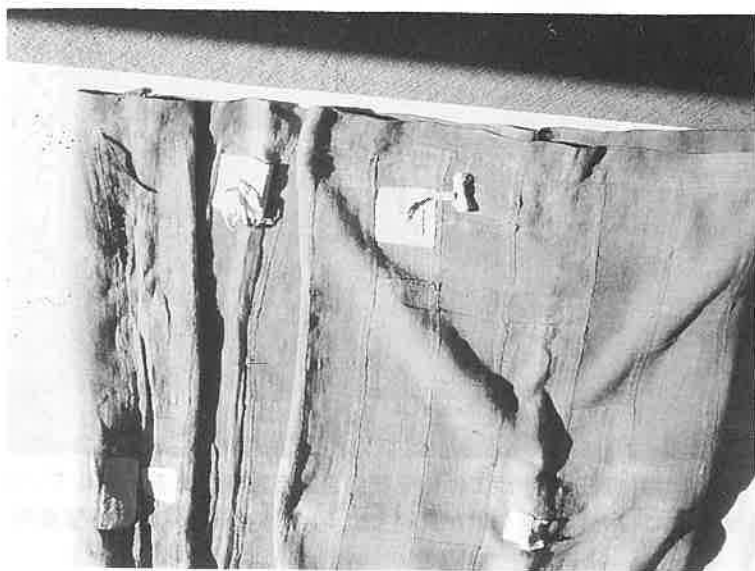
おほよそ、佛佛祖祖相傳の袈裟の功德、あきらかにして、信受しやすし。正傳まさしく相承せり、本様まのあたりつたはれり、いまに現在せり。受持しあひ嗣法していまにいたる、受持せる祖師ともにこれ證契傳法の師資なり。しかあればすなはち、佛祖正傳の作袈裟の法によりて作法すべし、ひ



この頂相は最近の学説では道元禪師自画自賛像であるとされているが、お袈裟には丸い大きな環が付いている。（福井県大野市宝慶寺所蔵）



「道元禪師大法衣」と伝承されている二十五条衣
(愛知県一宮町松源院所蔵)



環付きの袈裟から古規衣に改竄された袈裟
(福井県大野市宝慶寺所蔵)

とりこれ正傳なるがゆゑに、凡聖人天龍神、みなひさしく證知しきたれるところなり。

この法の流布にうまれあひて、ひとたび袈裟を身體におほひ、刹那須叟も受持せん、すなはちこれ決定成無上菩提の護身符子ならん。
〔正法眼藏袈裟功德〕

この言葉を一応平たく訳してみよう。

インドのお釋迦様から伝えられたお袈裟の功德は実は具体的であつて、これを信じて使わせていただくことは明解だ。なぜならば師匠から弟子へ、弟子からその弟子へと、贈与され伝えられてきたお袈裟の实物見本が現に存在しているからだ。そもそもお袈裟とは真劍に修行しあつた師匠と弟子が、その自覺の人生を同じく生きようと願ひ、その確乎とした信念が醸成されたとき

に、その証明として伝授されたのだ。それゆゑに、お袈裟はお釋迦様が直接示された作り方によつて、作らなければならぬし、そうでなければお釋迦様、歴代の祖師方から正しく伝えられたものと言ふことができないうし、その伝承の歴史については心あるものなら誰でも知っている。私たちは、現在そうしたお袈裟が伝承されている世界に生まれることができたのだから、たとえ東の間の、仮初の着用であつても、それを身に纏つたことそのものが、既にかげがないこの生命を、自覺の命として生きていく、—いわゆる佛道の大切なお守りとなっているのである。

この翻訳は古典文法上はあまり嚴密なものではなく、多少私自身の理解を含めたものであるが、現代人にはそれなりに理解しやすい部分も

「道元禪師大法衣」と共に襲藏される孤雲懷奘禪師像（愛知県一宮町松源院所蔵本より複製）

永平二年懷奘自贊

永平二年懷奘自贊

未破草鞋見本身

從來赤脚學雲步

人中第一極非人

深業所感醜陋贊





袈裟の環が塗りつぶされた寂圓禪師頂相（孤雲懷奘禪師像とも言われている）
（福井県大野市宝慶寺所蔵）

あるかも知れない。

月に棲むウサギとカエルの話から『正法眼藏袈裟功德』へと展開した私の文章は、誰がどう見ても飛躍が大き過ぎるし、まったく関係の無い話をしてるようにさえ見えることだろう。

しかしもう一度冷静に道元禪師の「佛祖正傳の袈裟」に就いて、その主張を眺めて行くと次第にその関連性が浮かび上がってくるものと思われる。先ほど私はカンボジアの僧侶が私と同じように木蘭色のお袈裟を偏袒右肩に搭けていたことを、同じ佛教徒共通の衣服として感激したことを述べたが、しかしよくそのお袈裟を較べてみると、私の袈裟が三五肘（肘の長さを四センチとして計算し、丈が三倍の百二十センチ、幅が五倍の二百センチ）程度のものであるのに、カンボジア僧の袈裟は五八肘程の、非常に大きなものであったし、またこちらが麻地に対して、あちらは木綿地、こちらは袈裟のほかに肌着や

下着類の上に纏っているのに対して、あちらは裙子（くんす＝腰ごろも）の上に直に袈裟を搭けていた。つまり、「共通の袈裟を着ている」と喜んだ割りには、「共通でない部分も多かった」のである。賢い読者は既にお気付のことと思うが、道元禪師が「佛祖正傳の袈裟」と呼んで、これこそ釋尊直伝のお袈裟だと信じて受持した道元禪師の信念は、「共通の袈裟を着ている」と喜んだ割りには、「共通でない部分も多かった」という私の体験に似通った部分があったように思われる。

三、古規復古運動と如法衣の問題

今までの記述を整理すると道元禪師が、非常に大切に、「これこそお釋迦様が示され、自身でも用いられた」と思っていたお袈裟は、実は必ずしもお釋迦様のお袈裟と同じではなかった。——ことに最近のように科学的な解明方法

が歴史の謎に深く挑む時代になると、従来の常識が音を立てて崩れていくのは、お互いの現代人が体験している通りである。

このように道元禪師のお袈裟そのものの歴史的な位置づけとは別に、我が国の江戸時代に、「道元禪師の用いたお袈裟と、現在の曹洞宗僧侶が用いているお袈裟は別なものであるから、道元禪師時代のお袈裟に戻さなければならぬ」という考え方と、そのための運動が展開されたのを思い出していただきたい。それは通常「袈裟復古運動」と呼ばれている。ここで「袈裟復古運動」の主張と推移に就いて少しばかり眺めてみよう。

『法服格正』という書物がある。これは江戸時代の半ばころ、尾張の黙室良要という僧侶が著した書で、少しでもお袈裟に興味を持つ人は、必ず目にするものである。その本の冒頭にある西有穆山禪師の序文は有名だ。

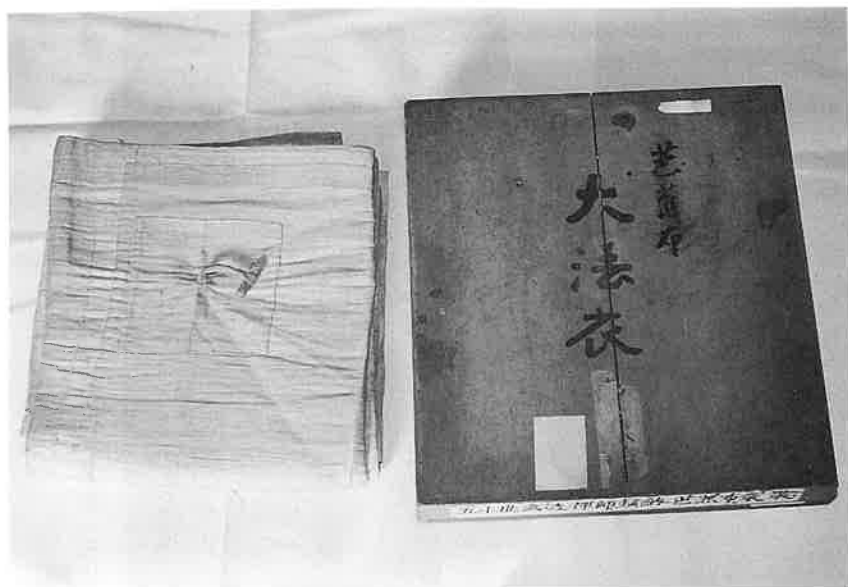
中古永平玄透禪師、古規の陵夷を慨き、之が恢復を圖るに、先ず三衣を格正せり。此の時に當り、一宗暮然として輒く隨はざる者、焉に多し。尾州萬松寺珍牛和尚、腕を扼ひて之を翼賛し、革弊論一冊を著すに、舉國稍や古に復せり。

という文章などは、青年時代の私を『正法眼藏』と袈裟の参究、そして永平寺五十世玄透即中禪師の研究へと誘ったことであつた。正直なところ、その頃のわたしは、道元禪師は如法衣を依用しており、宗門の袈裟は徹通義介禪師の頃から次第に変化してゆき、やがて道元禪師の袈裟は失われたという信念を抱いてたが、これは私に限らず、いわゆる宗門の「眼藏家」たちが等しく持った金科玉条でもあつた。ところが資料に基づいて冷静に考証して行くうちに私はとんでもないことに気が付いてしまった。

お袈裟を研究したり、あるいは実際に自分で

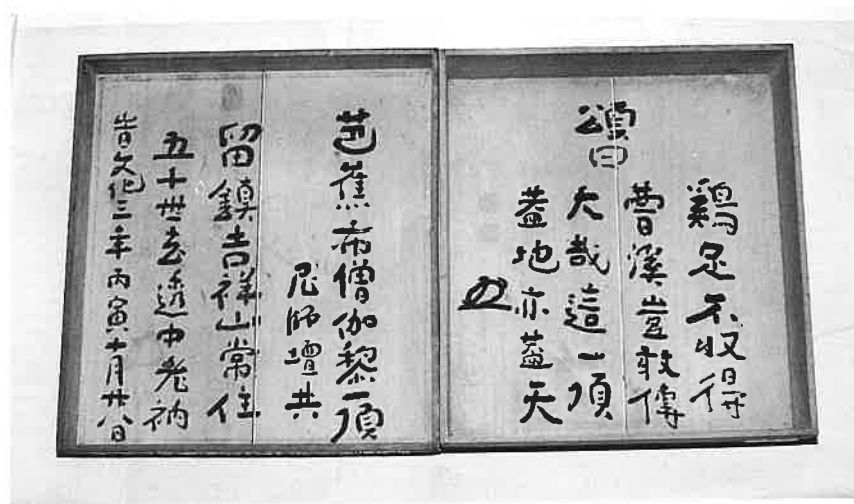
古規衣を搭けた玄透即中禪師頂相（福井県大野市宝慶寺所蔵）





古規復古の証として永平寺室中に留鎮された玄透即中禪師所持芭蕉布の九條衣

古規復古の証として永平寺室中に留鎮された玄透即中禪師所持芭蕉布の九條衣の箱書き





大徹宗令禪師傳衣（九條象鼻衣）を搭けた筆者（石川県門前町覺皇院所蔵）

把針して着用しているほどの人であれば、「如法衣」という言葉は誰でも知っている。これは釋尊が自ら制定されたと思はれている律に随って作られたお袈裟であり、中国宋代に流布した環付の、いわゆる「禪宗袈裟」——これを学問的には「流布衣」と呼んでいるが、——とは一線を画するものであると考えられている。だから青年時代の私は当然のことながら、道元禪師は「如法衣」を主張し、「如法衣」を着用していたと信じていたが、その後、地道に研究してゆくと、我が国の曹洞宗初期教団において如法衣は全く存在しなかつたのであり、道元禪師自身も有環の袈裟を着用していたという、意外な事実が明確となつてきた。如法衣とは律蔵になつた袈裟であり、佛教教団共通の袈裟であると思はれてきたものである。また道元禪師が『袈裟功德』『傳衣』の巻に佛祖正傳の袈裟を受持すべきことを示されているのも事実であるならば、法

孫の私たちはどのような袈裟を受持すべきなのか、これは大いに迷う所であり、そのために私の研究が始まつたのであつた。

四、正傳衣↓流布衣↓如法衣↓裁定衣

すでに十数年にわたつてこの研究を続けてきた私は、いくつかの結論を持つてゐる。それは宗門に袈裟の復古運動を始めたのは永平寺五十五世玄透即中禪師であり、その主張にそつてやがて如法衣が着用されるようになったことも確認された。かつて宗門の袈裟研究家は『法服格正』の

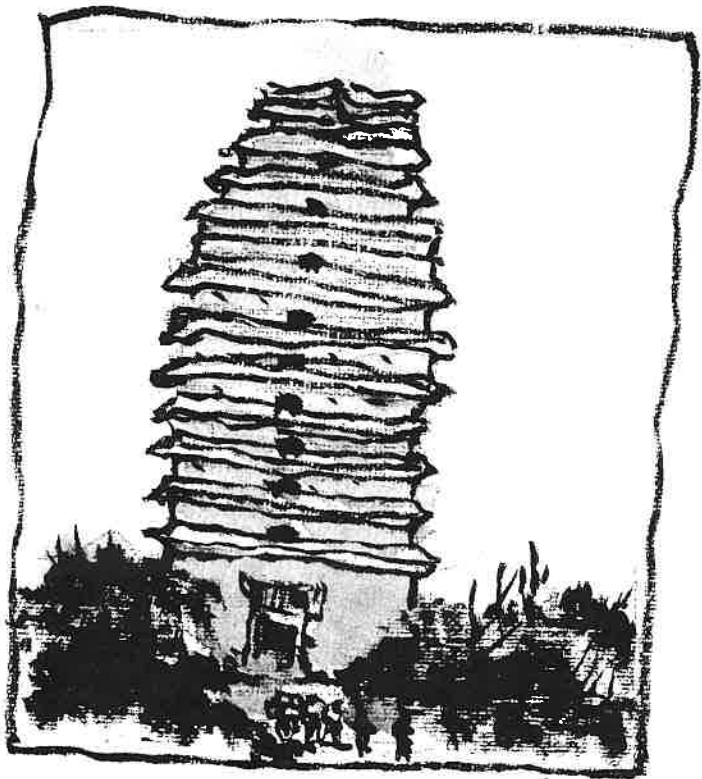
：世に刻画する地蔵や、羅漢や、祖師の像の袈裟に環あるものは、みな愚輩の無智妄作なり。：考るに趙宋の頃よりか一弊を生じて、象牙或は木をもて鉤に換へ：前鉤を右の角に施し、後鉤を中條に施し、鉤紐を改て前牌後牌と云に作るは訛替の甚き痛哭

すべきみ。

という主張に従い如法衣を佛祖正傳の袈裟と考えていた。それはたしかに筋が通っているが、歴史的事実はさらに不可解で、宗門室中の古袈裟を綿密に調査考証して行くと、いずれも環があり、いわゆる「流布衣」であることがわかってきた。ここに一つの興味深い事実がある。それは道元禪師が「佛祖正傳の袈裟」と呼んだお袈裟を、江戸時代における宗門袈裟研究家たちは「如法衣」と呼んだのだということである。しかしおそらくその流布衣の中に「佛祖正傳」を開悟したのが道元禪師であり、如法衣の中に「佛祖正傳」を開悟したのが袈裟研究家なのだ¹と受け取るのが妥当であろう。つまり「正傳衣」は道元禪師の大切にした袈裟で、「如法衣」は江戸時代における宗門の袈裟研究家たちの大切にしたお袈裟なのだ。これは余談になるかも知れないが、玄透即中禪師が袈裟復古運動の原点と

して主張した袈裟は、永平寺や、岐阜県関市の徳巖寺などに現存しているが、その作り方はほぼ「流布衣」の形態で縫われているが、袈裟の環だけは外されており、「如法衣」で用いられる鉤紐が付されている。つまり鉤紐の部分だけは「如法衣」であって、袈裟本体は「流布衣」なのである。これらの袈裟は「古規衣」と呼ばれたが、次第に「如法衣」に合流してしまった過渡的なものであった。もう一つ余談になるが、現在日本の曹洞宗門の僧侶が通常着用している袈裟は、幕末から明治初年にかけて、永平寺と總持寺の間において、袈裟環の有無に就いて激しい論争が有ったために、両山が協議の上裁定を下し、袈裟環は両山共に外すが、絡子には環を残すことにし、これは「裁定衣」と呼ばれている。

話を元に戻すが、「如法衣」と「正傳衣」には、共通の理念がありながら、具体的には大差



が有り、勢いこの逕庭が江戸時代安政期における永平寺と總持寺との三衣論争へと展開して行き、ついには由緒有る傳衣、開山祖師の木像、頂相にさえ容赦無い改作が断行されることになったのである。

五、結びとして

「道元禪師が信じて止まなかったお袈裟は、『正傳衣』なんだよ」という意見に対して、「道元禪師が大切にされたのは『如法衣』なんだ」という反対意見が出て、二百年ばかりの間、曹洞宗教団内で激しく展開された袈裟論争は、最近の科学的手法によって解明されて、「道元禪師は当時の禪宗僧侶が普通に搭けていたお袈裟を『佛祖正傳』と受け止めて搭けられた」のであり、江戸時代中期の袈裟研究家たちが信じていた「如法衣」ではなかった。ただ一つ明快な事実が有る。それは環付のお袈裟は中国禪宗の特

徴であるが、道元禪師の目指された佛道はインドのお釋迦様から正しく伝えられた法門であるとするなら、今日のように科学的手法で具体的なインドのお袈裟や中国、日本の古いお袈裟が解明できる時代にはどんなお袈裟が求められるのか、真剣に考えなければならぬのは事実だ。
(平成八年三月二十九日總持寺祖院に書く)

参考資料

- 『道元禪師研究』伊藤慶道著 大東出版社刊行
- 『佛像圖彙』紀秀信著 国書刊行会刊
- 『畫像須知』中西誠應著 関口道潤所藏
- 『道元禪師傳の研究』大久保道舟著 筑摩書房刊
- 『道元禪師鏡の御影』岩井孝樹著 永平寺「傘松」
- 『玄透即中の思想とその誓願』関口道潤著 復古会
- 『法服格正』黙室纂集 西有穆山刊行
- 『日本曹洞初期教団における法衣の研究』
関口道潤著